

日本福祉教育・ボランティア学習学会 学会ニュース

Japan Academic Association of Socio-education and Service Learning

No.88

2025年

11月19日発行

発行人：野尻紀恵 編集委員：熊谷紀良、松山毅、梅澤稔

〒983-0045 宮城県仙台市宮城野区宮城野1丁目7-7

[事務局：全国コミュニティライフサポートセンター(CLC)] Eメール jimukyoku@jaass.jp

第31回えひめ大会開催にあたって

大会実行委員長 **木村 謙児**（八幡浜みなと みなと交流館）

昨年、大きな節目となる第30回とうきょう大会の閉会式で次回開催地を代表して挨拶させていただきました。高浜虚子の句「去年今年貫く棒の如きもの」を詠ませていただき、福祉教育・ボランティア学習学会の歩みが、社会環境の変化していく中でも軸ぶれせず受け継がれていることに感銘したことを申し上げます。

さて、第31回開催地である愛媛において、どのような大会にしていくか、愛媛らしくとのアドバイスを受け、これまで愛媛県ボランティア・市民活動センターの福祉学習プロジェクト委員会で取り組んできた事業を振り返りながら、実行委員の皆さんと協議を重ねて参りました。

その結果として、第31回えひめ大会テーマを「過去の延長線上にない福祉教育・ボランティア学習を創造する～地域の未来を描く、協同実践とプラットフォーム～」と掲げました。

新型コロナウイルス感染症感染拡大の影響を受け、私たちは、人と人が出会いつながら続けることの大切さとその魅力を改めて実感する一方で、急速な社会環境の変化と、それに伴う社会問題と地域課題が複雑に絡み合う現代において、粘り強く議論を重ね、その本質やあり方を問い続けてきました。

今回のテーマは、私たちの活動の根幹を問い直し、新たな方向性を指し示す、極めて重要な指針であると認識しています。全国各地に存在する、豊かな実践や、これまでにない新たな視点からの研究を集積し、それらを「協同実践とプラットフォーム」の視点から多角的に検討する場となります。

参加者一人一人が、地域独自の課題や実践に光を当て、根本的な問い「福祉教育・ボランティア学習とは何か」に真摯に向き合い対話を行うこと。そして、その対話を通じて、次の時代を切り拓く新たな一歩を踏み出す知恵を結集できると確信しています。

また、えひめ大会で使用しているバナーは、和柄の「青海波（せいがいはい）」から作成しました。穏やかな波がどこまでも続いている様子を模様にした青海波は、「未来永劫平穏に」という意味が込められた吉祥柄です。これは、第30回とうきょう大会での、「寄り添い、表現・言語化し、問いを立て、出会いと交わりから鍵となる何かを導き出そう」という「気づきの連鎖」を引き継ぎ、えひめ大会で起こった波がどこまでも続いてゆくようにという想いを込めています。

そして、この愛媛の地で皆様が新たな「気づき」の種を見つけ、それが各地の拠点に帰って実を結び、「過去の延長線上にない福祉教育・ボランティア学習を創造すること」となり、地域共生社会の果たした大きな推進力となれば幸甚です。

今の愛媛県は、温州みかんの収穫の最盛期を迎え、さらに日本最古の湯と称される道後温泉や豊かな自然とともに、全国からご参加の皆さまを心よりお待ちしております。地域に根差した数多の実践の蓄積が息づくこの愛媛の地が、皆様の議論を深く豊かなものになりますことを願っております。



日本福祉教育・ボランティア学習学会 第31回えひめ大会

大会概要

◆————◆ 大会テーマ ◆————◆

過去の延長線上にない福祉教育・ボランティア学習を創造する ～地域の未来を描く、協同実践とプラットフォーム～

◆————◆ 大会趣旨 ◆————◆

近年、生成 AI の活用が急速に進展し、私たちは膨大なデータから最適解を導き出し、過去の延長線上に“ある”未来を描くことが可能になりました。しかし、このような「延長線上に“ある”未来を描く仕事」は、生成 AI によって代替される可能性が高まっており、懸念の対象ともなっています。その一方で、「過去の延長線上に“ない”未来を構想し創造する力」には、依然として人間ならではの創造性が求められており、改めてその重要性が注目されています。

福祉教育・ボランティア学習に関する実践や研究も、これまで蓄積されたデータや知見を活用することで、一定のプログラムや研究成果を容易に得ることが可能になっています。しかし、福祉教育・ボランティア学習は、福祉に関する知識や理解、活動を求めるだけにとどまらず、「地域共生社会の実現」に向けた地域づくりの一環として、より大きな社会的意義を担うようになっています。

こうした変化の中で、「福祉教育・ボランティア学習とは何か」という根本的な問いが、私たちに投げかけられています。実際に、本学会では、課題別研究に見られるように、これまでにない新たな視点からの研究も進められており、さらに、全国各地ではデータには表れにくい豊かな実践も数多く存在しています。これらはまさに、「過去の延長線上に“ない”福祉教育・ボランティア学習」の可能性を示しているといえるでしょう。

本大会の最大の特徴は、全国の実践者、研究者、参加者が、互いの当事者性を交差させ、学び合うことができる点です。前日企画、総合シンポジウム、課題別研究、情報交換会、自由研究発表といった多様なプログラムを通して、福祉教育・ボランティア学習の意義・必要性・理論・価値についての言語化を促進していきます。本大会を通じて、生成 AI には模倣できない、私たちにしかできない「過去の延長線上にない福祉教育・ボランティア学習の創造」について、皆さまと共に考えていきたいと思っています。

愛媛県での3日間は、参加者の皆さまにとって、新たな地域の未来を描く契機となることを、実行委員会一同、心より願っております。

◆————◆ 主 催 ◆————◆

日本福祉教育・ボランティア学習学会 第31回えひめ大会実行委員会

◆————◆ 後 援 ◆————◆

愛媛県 愛媛県教育委員会 聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部 人間環境大学 愛媛大学
松山大学 全国社会福祉協議会 愛媛県社会福祉協議会 愛媛県内20市町社会福祉協議会
愛媛県民生児童委員協議会 愛媛県社協職員連絡会 愛媛県ホームヘルパー協議会
愛媛県保育協議会 愛媛県老人福祉施設協議会 愛媛県児童福祉施設連合会
愛媛県社会就労センター協議会 愛媛県社会福祉法人経営者協議会

◆————◆ プログラム ◆————◆

▼大会前日 11月28日(金) 会場：サイボウズ松山オフィス

時間	内容
13:30～	前日企画【学会ネットワーク委員会企画ワークショップ】

▼大会1日目 11月29日(土) 会場：聖カタリナ大学 北条キャンパス

時間	内容
9:00～	受付
10:00	ふく・ボラサロン【学会企画】
11:30	昼食休憩 ※ 11:40～12:20 ランチセッション
12:30	開会式
12:50	総合シンポジウム
14:10	休憩・移動
14:25	課題別研究【学会企画】
	課題別研究【えひめ企画】
16:35	休憩・移動
16:50	学会総会
18:10	移動（情報交換会出席者のみ）
19:30	情報交換会 (会場：ANA クラウンプラザホテル松山)

※受付（211 教室前ロビー）において、書籍等の販売も行っています。ぜひお立ち寄りください。

▼大会2日目 11月30日(日) 会場：聖カタリナ大学 北条キャンパス

時間	内容
9:00～	受付
9:30	自由研究発表【口頭】
	自由研究発表【ポスター】
11:50	休憩・移動
12:20	大会発表賞表彰式
12:30	閉会式

◆————◆ プログラム詳細 ◆————◆

▼前日企画（11/28）

学会ネットワーク委員会企画ワークショップ

『実践者の言葉で語ろう“福祉教育の価値と創造”』

【日 時】 令和7年11月28日（金）13：30～16：30

※終了後交流会を開催（任意参加／1時間程度）

【会 場】 サイボウズ松山オフィス（松山市二番町3丁目7-12 3階）

【内 容】

時間	内容
13:30（10分）	趣旨説明
13:40（60分）	事例発表(質疑応答含む) ①包摂の新しい学び創造委員会（愛媛県新居浜市） ②本山町社会福祉協議会（高知県）
14:40（30分）	事例を読み解く
15:10（10分）	休憩
15:20（50分）	グループワーク
16:10（20分）	グループ発表・まとめ

【世話人】 日本福祉教育・ボランティア学習学会ネットワーク委員会

梅木 博志（横浜市社会福祉協議会）、坂本 大輔（登別市社会福祉協議会）

伊藤 光洋（江南市社会福祉協議会）、畑 清美（三田市社会福祉協議会）

牧野 大樹（横浜市港北区社会福祉協議会）

全国社会福祉協議会 全国ボランティア・市民活動振興センター

▼大会1日目（11/29）

ふく・ボラサロ

『ーふくし教育のティギをいっしょにつくろう！ー』

【世話人】 堤 拓也（佛教大学）、後藤 聡美（神戸大学）、小林 洋司（日本福祉大学）

ランチセッション

『研究・論文作成における倫理的配慮とは』

【世話人】 機関誌編集委員：山田 一隆（東海大学）、高木 寛之（山梨県立大学）

研究・倫理委員会：川島 ゆり子（日本福祉大学）

開会式

学会長あいさつ 野尻 紀恵（日本福祉大学）

大会長あいさつ 坂原 明（聖カタリナ大学・聖カタリナ大学短期大学部）

総合シンポジウム

『続 究める 拡がる 福祉教育・ボランティア学習 ～実践と研究の歩みとこれからの未来～』

【コーディネーター】高木 寛之（山梨県立大学）

【シンポジスト】宮崎 早苗（愛南町社会福祉協議会）、山口 憲昭（柏遊会：地域活動組織）

馬詰 圭祐（特別養護老人ホーム自在園）

【コメンテーター】小林 洋司（日本福祉大学）、宮本 朋子（有田市社会福祉協議会）

課題別研究【学会企画】

①『「社会福祉・介護福祉検定」のレリバンスーその３ー』

【世話人】矢幅 清司（淑徳大学）、真田 龍一（東奥学園高等学校）、

中山 見知子（群馬県立藤岡北高等学校）、茶木 正幸（名古屋市立西陵高等学校）、

高木 諒（愛知県立古知野高等学校）、出沢 秀子（山梨県立大学）、

清信 大樹（人間環境大学）、岡 多枝子（人間環境大学）

※研究協力：鈴木 幹治（三重県立朝明高等学校）

②『福祉教育・ボランティア学習における当事者/当事者性研究とインクルーシブ ボランティアーインクルーシブボランティアは、当事者の主権を侵害しない「学習 者の当事者性獲得」を可能にするのかー』

【世話人】岩本 裕子（関西国際大学）、妻鹿 ふみ子（神奈川大学非常勤）、

南 多恵子（関西福祉科学大学）岩田 貞昭（大阪人間科学大学）、

永井 美佳（大阪ボランティア協会）、青山 織衣（大阪ボランティア協会）、

村上 貴栄（兵庫大学）

③『社協職員の福祉教育実践における価値の言語化 ～多様な実践の蓄積から紡ぎだす基盤としての価値～』

【世話人】梅木 博志（横浜市社会福祉協議会）、伊藤 光洋（江南市社会福祉協議会）、

井上 正太郎（宮崎県社会福祉協議会）、川島 ゆり子（日本福祉大学）、

坂本 大輔（登別市社会福祉協議会）、渋谷 篤男（日本福祉大学）、

高木 寛之（山梨県立大学）、畑 清美（三田市社会福祉協議会）、

牧野 大樹（横浜市社会福祉協議会）

『愛媛県における福祉教育・ボランティア学習のプラットフォームの変遷と可能性 ～防災学習を中核とした多様な主体の連携・協同による地域づくり～』

【コーディネーター】高木 寛之（山梨県立大学）

【話題提供者】喜安 恒賀（愛媛県社会福祉協議会）、木村 謙児（八幡浜みなと みなと交流館）、
武田 祥枝（松野町社会福祉協議会）、宮土 良太（トロール会議事務局）、
丸山 真利奈（八幡浜市社会福祉協議会）、前田 眞（愛媛大学）
林 昭子（BOUSAI ゼミな～る実行委員会・BISAI-FARM）、

【コメンテーター】大石 剛史（東北福祉大学）、高橋 良太（全国社会福祉協議会）

学会総会

学会員の方はご参加ください。

情報交換会

19：30～ A N A クラウンプラザホテル松山 本館 4 階「ダイヤモンドボールルーム」

情報交換会への送迎バスの集合場所は、大学玄関前です。【出発時間 18：25】

▼大会 2 日目

自由研究発表【口頭】

【第 1 分科会】 概念・原理・歴史・政策

司会：松岡 廣路（神戸大学）、熊谷 紀良（東京都社会福祉協議会）

東京都における教科「奉仕」必修化の政策形成過程

○梶野 光信（日本大学）

ボランティア活動の試行期・拡大期における活動理念の検証

－大槻久子ボランティア関係資料群の分析を手がかりとして－

○藤原 孝公（ボランティア史研究会）、後藤 務（ボランティア史研究会）、安藤 雄太（ボランティア史研究会）、都賀 潔子（ボランティア史研究会）、熊谷 紀良（ボランティア史研究会）

福祉教育・ボランティア学習における「当事者性をめぐる学習論」の意義と今後の展望に関する一考察

○大石 剛史（東北福祉大学）

【第2分科会】高等学校を中心とした展開

司会：小林 洋司（日本福祉大学）、吉田 祐一郎（四天王寺大学）

高校生が福祉ボランティア活動に結びつくまで－福祉ボランティアの概念規定と結びつきについて－

○橋本 嶺登（長野大学大学院）

日本におけるサービス・ラーニングの展開(35)－東京都立 K 高校におけるコロナ禍前後の変化－

○古川 秀夫（龍谷大学）、山田 一隆（東海大学）、大東 貢生（佛教大学）、
柴田 和子（龍谷大学）、富川 拓（聖泉大学）

高校・大学・社会福祉協議会による三者連携の成果と課題

～愛媛県立今治南高等学校における「総合的な探究の時間（福祉）」を通して～

○田村 浩志（松山東雲女子大学）、濱園 翔太（愛媛県立今治南高等学校）、
山中 孝重（愛媛県立今治南高等学校）、越智 直樹（今治市社会福祉協議会）、
正岡 純子（今治市社会福祉協議会）、阿部 愛子（今治市社会福祉協議会）、
徳丸 里奈（今治市社会福祉協議会）

【第3分科会】大学を中心とした展開・実践プログラム・評価に関する報告・ 海外の動向などに関する報告

司会：松山 毅（順天堂大学）、新崎 国広（ふくしと教育の実践研究所 SOLA）

大学におけるボランティア活動支援に関する全国実態調査（2024）の概況

○森 純一（東京ボランティア・市民活動センター）、瀧澤 利行（茨城大学）、榎本 朝美（東京ボラ
ンティア・市民活動センター）、加藤 織江（東京ボランティア・市民活動センター）

社会的養護の児童と支援者を対象とした自己及び他者信頼向上ワークショップの提案

○楠 聖伸（武蔵野大学）、保井 俊之（叡啓大学）、前野 隆司（武蔵野大学）、
白坂 成功（慶應義塾大学大学院）

知的障害児（者）へのイメージに影響を与える交流経験の質的特性的探索的分析

－保育科学生の施設実習前後のアンケート調査分析から－

○長谷中 崇志（愛知みずほ短期大学）、高瀬 慎二（愛知みずほ大学）

イギリスにおけるヤングケアラー支援に見られる福祉教育アプローチ

○原田 康信（日本福祉大学）、野尻 紀恵（日本福祉大学）

【第4分科会】地域・施設・社協を中心とした展開①

司会：川島ゆり子（日本福祉大学）、高橋 良太（全国社会福祉協議会）

福祉教育における4つの要素間の変遷による地域福祉推進に関する考察

～松野町社会福祉協議会の実践事例を通して～

○雑賀 正彦（新見公立大学）

高校生が支援する高齢者向けスマホ教室の参加効果－高齢者の ICT 利活用を中心に－

○崔 恩熙（松山東雲女子大学）、清信 大樹（人間環境大学）

ふだんの ぐらしの しあわせ（ふくし）の充実を目指す住民主体の活動の推進についての研究

○古川 裕隆（碧南市社会福祉協議会）、野尻 紀恵（日本福祉大学）

【第5分科会】 地域・施設・社協を中心とした展開②

司会：妻鹿ふみ子（神奈川大学非常勤）、諏訪 徹（日本大学）

共育としての防災教育の実践－地域・福祉協働による多世代プログラムの可能性－

○高村 秀史（日本福祉大学）、安藤 祐実（北方町社会福祉協議会）

都道府県・指定都市域における福祉教育推進プラットフォームの概念整理と実態把握

－全社協の取り組みの再考にあたって－

○藤川 奈月（全国社会福祉協議会）

社会的排除、差別、偏見に対して有効な福祉教育のあり方とは

－ライツ・ベース型の福祉教育実践について－

○西村 洋己（兵庫県立大学院・岡山県社会福祉協議会）

自由研究発表【ポスター】

障害理解教育の実践的研究に関する－考察 015 年～2025 年の研究動向を手がかりに

○高橋 眞琴（鳴門教育大学）、中西 裕子（兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科）、尾関 美和（尚絅大学）、田中 淳一（鳴門教育大学）

大学生のボランティア活動への参加阻害要因に関する多角的比較考察

○佐藤 大介（日本福祉大学）

教育振興基本計画と社会教育・市民活動分野との関連性

－基礎自治体へのアンケート調査結果から見た現状と課題－

○久米 隼（武蔵野短期大学）、若園 雄志郎（宇都宮大学）、石井 大一郎（宇都宮大学）

学校教員にとっての「地域社会に「身を置く」ということ－ふくし教育実践に関わる学習支援者の学び－

○石原 光彩（株式会社学研ココファン）、山田 一隆（東海大学）

「病院×地域住民」によるコミュニティ・ベースド・ラーニングに関する研究

－福島県いわき市かしま病院における患者・住民参画の学びのデザイン－

○石井 大一郎（宇都宮大学）、小松 理虔（ヘキレキ舎）、前野 有咲（ヘキレキ舎）

園芸・造園系学生を対象にしたガーデニング活動と関連づけた福祉教育実践

○林 典生（南九州大学）

福祉教育・ボランティア学習は受援力の向上に寄与するか？－2 次データによる探索的分析－

○菊池 遼（日本福祉大学）

日本におけるサービス・ラーニングの展開(34)

－インタースクール型ボランティアサークルにおける学びと成長の考察－

○山田 一隆（東海大学）、大束 貢生（佛教大学）、富川 拓（聖泉大学）、
古川 秀夫（龍谷大学）、柴田 和子（龍谷大学）

初年次教育における共生社会の実現に貢献する教育実践ガイドラインの検討

～「共生社会実践論」の授業アンケートの分析を通じて～

○萬代 由希子（関西福祉大学）、岡崎 利治（関西福祉大学）、森 歩夢（関西福祉大学）

聖カタリナ大学学生ボランティアセンターの活動を通して－地域の新しい未来を担うセンターとしての協同実践－

○近藤 益代（聖カタリナ大学）、遠藤 文子（聖カタリナ大学）、梶原 琉生（聖カタリナ大学）、
森岡 菜々子（聖カタリナ大学）

福祉教育の視点からとらえるインクルーシブ保育の社会的意義－ある医療的ケア児の保育実践をもとに－

○藤田 久美（山口県立大学）、高橋 幾（山口県立大学）

医療的ケア児と周囲の児童との関わりでの生成について－担任の語りに基づく質的検討－

○高橋 幾（山口県立大学）、藤田 久美（山口県立大学）

大会発表賞表彰式

閉会式

実行委員長あいさつ 木村 謙児（八幡浜みなとみなと交流館）

学会副会長あいさつ

次年度開催地あいさつ



拡大理事会を開催しました

理事・事務局次長 大石 剛史（東北福祉大学）

去る 2025 年 9 月 7 日、学会拡大理事会（理事及び特任理事が参加）を開催しました。拡大理事会は学会の現況について確認するとともに、学会の今後について話し合うことを目的に年 1 回開催しており、今年は日本福祉大学東海キャンパスでの対面及びオンラインのハイブリッド形式で開催しました。

まず学会大会関連報告として、11 月に開催のえひめ大会と 2026 年度に開催されるおおさか大会の準備状況について報告されました。えひめ大会については順調な準備状況が報告され、おおさか大会については、新崎国広大会実行委員長より、第 1 回実行委員会を開催したことが報告されました。大阪を会場とした大会は 2020 年にコロナウィルス感染拡大により中止になった経緯があり、それ以来の開催に向けて準備が始められています。

次に課題別研究報告として、現在進行中の 3 つの課題別研究について、それぞれの進捗状況の報告とそれに基づいた質疑応答が行われました。3 年目を迎える『「社会福祉・介護福祉検定」のレリバンズー高校福祉教育の新たな地平を拓く』については、これまでの研究で、「検定」が高校から福祉系大学へのキャリアラダーになり得る可能性について報告されました。2 年目の『インクルーシブボランティア：「誰もが参加できる」を目指してー実践知は理論を生み出せるか』では、インクルーシブボランティアの理論化を目指した今後の研究計画が報告されました。1 年目となる『社協職員の福祉教育実践における価値の言語化 ～多様な実践の蓄積から紡ぎだす基盤としての価値～』については、今後の研究計画が示され、これまで学会が作ってきた「価値」と、これから研究で言語化される「価値」との関係はどう捉えるかについて議論が行われました。

最後に、3 つのグループに分かれて今後の学会活動に向けた議論が行われました。学会活動の課題として、「学会での研究と実践との結びつきについて、停滞があるのではないか」という指摘や、「今後学会が取り組むべき優先順位の高いテーマを問い直すべきではないか」といった指摘があがりました。一方、本学会の「いい意味での緩やかさ」を活かして、高校生や大学生などの若者、あるいは当事者が、学会大会で発表できるような場面を作ってはどうかという意見も出されました。そのために、学会発表を学会員に限定している現在の規定を緩める議論をしてはどうかという提案もなされました。

本学会は昨年設立 30 周年を迎え、今年は理事選挙により運営体制が切り替わります。これまでの学会の積み重ねを継承しつつ、内外の情勢を踏まえて新たなチャレンジを行っていく必要性を感じた拡大理事会となりました。

●編集後記●

本号では、日本福祉教育・ボランティア学習学会第 31 回えひめ大会の開催概要、プログラムを掲載いたしました。実行委員会の皆さまのご尽力により、愛媛らしさ、特色を生かした意義深い大会が準備されています。大会の魅力は、新しい出会いと学びに出会えること。多くの皆さまのご参加を期待しています。

学会ニュースでも全国の実践研究を発信していければと思います。（梅澤）